

## 日本の説教文化とキリスト教の説教

大和昌平

### 序

本稿は今回の研究テーマが「誰に・何を・いかに」に三分される中で「誰に」を担当し、それを「日本人に」と限定して論を起す。そもそも説教という用語自体が仏教用語であり、日本のプロテスタント説教史のほぼ十倍になる千五百年の説教史を日本仏教が有している事実を認めることから始めたい。『説教の歴史的研究』<sup>1</sup>において関山和夫氏は、次のような指摘をしている。

「キリスト教が『説教』の呼称を用いているのも興味深い。今や大都会では『説教』は、『説諭する（叱る・小言をいう）』という意味にしか使われなくなっている。それにしても仏教伝来以後、千何百年にもわたって使われ、日本人に親しまれて来た『説教』の用語やその伝統の長所まで総て仏教界自らの手で葬り去られた格好であるのは、私には理解出来ないことである」<sup>2</sup>。

関山氏の指摘するように、今や「説教される」という言い方で「堅苦しく・くどい話を聞かされる」という意味しかなく、本来の説教にそのような歴史があることも一般には知られていない。しかし、仏教における説教は日本において言語表現技術や芸術としての話芸の根幹をなしてきたのであり、説教から落語・講談・浪曲・浄瑠璃等の様々な伝統的話芸が生み出されてきた。日本にお

<sup>1</sup> 関山和夫『説教の歴史的研究』（法蔵館、1972年）

<sup>2</sup> 前掲書、395頁

ける説教文化に目を向け、そこにキリスト教の説教を位置づけたいというのが、筆者の問題意識である。

本稿は三部構成とし、「Ⅰ. 日本の説教文化」を中心とするが、その中で植村正久の説教に言及する。「Ⅱ. 小畑進氏の表白体と加藤常昭氏の演説体」は、加藤常昭氏の創始された説教塾のひそみに倣って「自伝的」に、筆者が親炙した小畑進氏（1928—2009）と私淑してきた加藤常昭氏（1929—）の説教を対比しつつ、日本の説教文化の類型に沿って若干の考察してみたい<sup>3</sup>。最後に、「Ⅲ. 日本人に語られなかった説教の主題」を付加して、小論を結びたい。

## Ⅰ. 日本の説教文化

### 1. 表白体と演説体

日本仏教における説教は、説経・説法・説戒・談義・法談・唱導・讚歎・観化・講釈・講談・化導・法座・御座・法話等、様々な呼称を持ってきた。関山氏は、説教を表白体と演説体の二種に分類する。表白体とは定式に基づき整えられた文章で記された説教であり、言わば読まれる説教である。演説体とは聴衆に効果的に話しかけるために譬喩なども多用されるもので、言わば話される説教である。表白体の説教本を台本として、演説体の説教がアドリブや脚色を加えつつ行われるということも行われてきた。実際に仏教が布教される上で力を発揮したのは演説体の説教であり、そこで日本の話芸の根幹が築かれてきたのである。関山氏の『説教の歴史的研究』も「主としてわが国における説教（演説体を中心として）の歴史と、説教が文学・民間芸能や庶民文化等に及ぼした影響を中心に考察を進めたい<sup>4</sup>と前置きされている。

本稿においても、読まれる説教としての「表白体」と話される説教としての「演説体」という分類を用いていきたい。完全原稿を書き、それを読み上げるタイプの説教は、表白体に分類されるだろう。また、最初から読まれる説教で

<sup>3</sup> 加藤常昭氏に『自伝的説教論』（キリスト新聞社、2003年）がある。論文において取り上げる人物は敬称略するのが相応しいが、本稿は当代の説教者を取り上げるため、また筆者の面識のある人については「氏」を付することとする。

<sup>4</sup> 関山和夫『説教の歴史的研究』10頁

あることを意識して出版される説教集も表白体に位置づけられる。一方、聴衆に語りかけることを意識して、メモや原稿は準備していても、その場でアドリブも加えて語る説教は演説体に分類される。演説体として語られた説教がまとめられて説教集として出版されるものもある。後に扱う小畑進氏の説教は表白体に類するものであり、聴衆は一字一句を聞き逃さない緊張感で説教を聴く。説教集の出版において当代随一の加藤常昭氏の説教は演説体に類するものであり、柔らかい印象を受ける話し言葉としての説教集が出版されている。そこには両者の説教観の違いが現れているだろう。

### 2. 聖徳太子による日本人最初の説教

日本人に語られた説教の最初の記録は、推古天皇の摂政であった聖徳太子（574—622）が598（推古6）年に天皇の命を受けて行った勝鬘経講である。勝鬘経は大乗経典の一つであり、その経典の言わば講解説教が聖徳太子により公の席で行われ、天皇並びに重臣たちの好評を博したことが「諸王公主及臣連公民信受して喜せざるはなし」（『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』）と記録されている。聖徳太子には著作として『三経義疏』があるが、これは大乗経典の勝鬘経・法華経・維摩経に注釈を加えたものである。太子の仏教理解の深さには百済系の外来僧の仏教理解が反映されていると見られるが、仏教の本格的な理解を示し、その教を最初に説教した日本人は聖徳太子である。

それまで肯定的な人生観と連続的な世界観をもった日本人に、人生を否定的に深く考えさせる思想を初めてもたらしたのは、インドに発する普遍宗教としての仏教であった。目の前の現象世界がはたして確かなものなのか（諸行無常）、自分という存在も儚いものではないか（諸法無我）と問い直す「否定の論理」（家永三郎<sup>5</sup>）を、仏教は日本にもたらした。日本古来の民間習俗としての自然宗教が神道と自称するようになったのも、この仏教渡来の衝撃によるものであった。創唱宗教である仏教は教えの体系を持ち、経典と教団を有するものであり、その教を広く説く説教という活動を必然的に伴った。

仏教が初めて「日本人に・何を」説いたかを象徴的に表わすのは、十七条憲

<sup>5</sup> 家永三郎『日本思想史に於ける否定の論理の発達』（新泉社、1969年）



法にある聖徳太子の次の言葉である。

「我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。」(十七条憲法第十条)

「凡夫」とは、ただの人であるという意味であり、ここには彼我の差別を超えた普遍的な人間理解が表わされている。聖徳太子にとっては親族である蘇我馬子の天皇に対する横暴に苦しみながらも、政敵馬子を倒す戦いに出ることはせず、己に刃を向ける宗教性を示している。太子の長子である山背大兄王は、戦いに出れば破ることのできた蘇我入鹿を、戦による民の惨禍を避けるために一族自滅の道を選ぶ。これは仏教においては己の身を他者に与える「捨身行」であり、慈悲の極致とされる行動である。この慈悲の概念がキリスト教におけるアガペーの愛にもっとも近接していると、ドイツの仏教学者ヘルマン・ベック(Hermann Beckh 1875-1937)は評している<sup>6</sup>。慈悲の意味するところは、他者に良きものを与え、他者の苦しみを取ろうとする心である。仏教用語としての愛は、欲愛・渴愛など己の欲望を専ら意味し、聖書における愛とはかけ離れている。後に神道家の平田篤胤は、聖徳太子は仏教を奉じたがゆえに腰抜けであったと酷評するが、後世の日本人は悲劇の宗教者・聖徳太子を日本人の心として誇り、崇敬するに至る太子信仰は広く伝えられてきた。

説教において「日本人に・何が」語られたかという視点で見れば、聖徳太子によって自己否定と慈悲の思想が語られ、その普遍的な宗教性が尊敬されてきたことは疑いない。現代日本において最も敬愛される日本人の思想家は親鸞であり、その親鸞が深く尊敬したのが聖徳太子であったことも覚えてほしい。「共に是れ凡夫のみ」という自己否定を伴った人間理解は、一般啓示のレベルで仏教を介して日本人に語られたものである。パウロがアテネ人に向かってアレオパゴスで「私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております」(使徒17:22)と語ったごとく、仏教によって自己否定と慈悲の思想に養われた日本人であることは評価すべきだろう。その仏教における「否定の思想」を踏まえて、キリストにある自己否定と贖罪愛を伝えるのが、パウロの異邦人への説教に学ぶことになるのではないだろうか。

<sup>6</sup> ヘルマン・ベック『仏教』上巻(岩波文庫、1994年)154頁

### 3. 王朝貴族にもはやされた説教師

平安時代には、仏教における説教の典型的なスタイルが確立される。「法華八講」という形式がそれであり、大乘經典の法華經八卷の説教を八回に分けて行うものである。室内に高座を設けて行うこの説教の形式は、その後の寺院等における説教から近世の寄席演芸にまで受け継がれてゆく。矢内原忠雄は夏期講習会などでエレミヤ記を三回に分けて説教する場合、それを「エレミヤ記三講」<sup>7</sup>と称している。意識してかどうか、日本の説教の古式を踏まえていて奥床しい。

「法華八講」は一般人には内容的にも難解なものであったろうが、平安時代の王朝貴族の間で学僧による説教の法会は社交場でもあった。美形・美声の説教師がもてはやされ、高座における説教批評も行われていたという。教養ある王朝貴族の間で説教の聴聞は娯楽的要素を多分に持っていたのである。日本の説教に影響を与えた中国仏教においては、「声・弁・才・博」のある説教が求められた(『高僧伝』卷十三)。すなわち、声がよく、弁舌に優れ、機知に富んだ、博識の説教者をよしとしたのであり、これはオーソドックスな説教の評価基準だと言えよう。これに対して、平安の宮廷では、「一声・二節・三勇」と言われた。つまり、説教師は美声で、節廻しよろしく、美男であることが求められたのであり、より世俗的な説教の展開が日本では見られたのである。清少納言(966頃-1025頃)の『枕草子』には説教に関する次のような記述がある。

(原文)

「説教の講師は顔よき。講師の顔をつとまもらへたるこそ、その説くことのたうとさも覚ゆれ。ひが目しつればふとわするに、にくげなるは、罪や得らんとおぼゆ。このことはとどむべし。すこし歳などのよろしきほどは、かやうの罪得がたのことは、書き出でけめ。今は罪いと恐ろし。』『枕草子』三十段<sup>8</sup>

(現代語訳)

「説教の講師は、美男なのがよい。夢中になって、ひとと講師の顔を見守っておればこそ、その説き聞かせる仏法のありがたさも感得できるというものだ。よそ見していると、聞いたことも途端に耳から耳へ筒抜けになるから、顔のみにくい講師の説教を聞くのは、不信心の罪をおかすことになろうかと、心配に

<sup>7</sup> 矢内原忠雄『聖書講義 [8] ヨブ記・エレミヤ記』(岩波書店、1995年)

<sup>8</sup> 清少納言『枕草子』新日本古典文学大系25(岩波書店、1995年)39頁



思われるのだ。いやいや、こんなことは書くべきではない。自分ももう少し歳の若いうちなら、こんな罪をおかすようなことも平気で書きもしたろうが。歳とった今となっては、仏のおいしましめにそむくことはたいそう恐ろしい。」<sup>9</sup>

清少納言による『枕草子』の初稿は1001年だから、三十代半ばでこれを書いていることになる。二十七歳頃から中宮定子に仕えていた彼女は、二十歳頃の若い自分をふりかえって、今はこんな軽はずみな冗談を言うべきではないと反省している。公卿らの集う説教会は大変な賑わいで、「すべて尊きことの限りにもあらず、をかしき見物なり」（現代語訳「全体に、ありがたい法会の催しというだけでなく、綺羅を飾ったショーの観がある。」<sup>10</sup>）とも清少納言は評している。

一人の人間が人前に立って内容を整えて話をし、それを多くの人が聴聞する。この言語伝達形式においては、語る者に中国仏教の基準のように「声・弁・才・博」が求められるのは必然である。また、王朝貴族の間で美声・美形の説教師がもてはやされたという日本文化の歴史も、日本人に説教をする者として覚えておくべきであろう。キリスト教の説教者にしても、大衆の人気を博することに走る逸脱の可能性はあるからである。

#### 4. 日本仏教に伝承された説教の型

平安時代にはまた最澄（767-822）による天台宗と空海（774-835）による真言宗が、仏教教団として大きな展開を見せた。その天台宗において「三周の説法」と呼ばれる説教の型が作られる。「法説・譬喩・因縁」の三項目で説教を形成するというもので、経典から教えを説き、それを譬喩でわかりやすく説明し、さらに実例をもって教えを印象深く語って終わるという次第である。この三周の説法が、日本仏教における説教の原型となる。

鎌倉時代には天台宗の僧侶であった澄憲（1126-1203）と浄土教に帰依した聖覚（1167-1235）の親子が興した、安居院流と呼ばれる説教の流派が隆盛を見せた。この流派が以下のような「説教の五段法」という型を作る。

- ① 讃題：説教の主題として、経論・祖釈の一節を読みあげる。
- ② 法説：讃題の意味をわかりやすく解説する。
- ③ 譬喩：讃題・法説をいっそうわかりやすくするために譬喩談をできるだけ興味深く話す。
- ④ 因縁：讃題・法説を証明するための事例をあげる因縁談を話す。
- ⑤ 結勸：説教の要点をまとめ、聴聞者に勧めをする。

これは三周の説法を下敷きにして、最初に経典や注解のテキストを読み上げる「讃題」を置き、終わりに結論から適用を行う「結勸」を配して、型としてさらに整えたものである。この「説教の五段法」がその後の説教のスタンダードな構成法として受け継がれてゆくことになる。この説教構成の秘訣は、次のようにも言い伝えられた。

「讃題について離れて またついで 花の盛りに 置くぞよろしき」<sup>11</sup>

讃題は説教のテキストであるから、最初に説明したテキストから譬喩や実例で一旦離れ、最後にもう一度テキストに立ち帰り、そこで説明口調に戻ることなく、最高潮の盛り上がりの中で、その余韻を残しながら終われ、と教えているのである。これなど「讃題」を「テキスト」と言い換えると、そのまま我々プロテスタントの説教者の座右の銘ともなりうるものであろう。もっとシンプルな言い伝えとして、次のものがある。

「はじめしんみり、中おかしく、終り尊く。」

「はじめしんみり」は讃題と法説の部分であり、「中おかしく」は譬喩と因縁の部分で、「終り尊く」は結勸の部分を表わしている。説教テキストの読み上げとその解説は最初から声を張り上げずに「しんみりと」行い、その教えを譬喩や因縁譚でもって「中おかしく」盛り上げて聞かせ、最後の勧めは威厳を持って「終り尊く」すべきだというのである。説教に取り組んだ日本人の年月の高を思わせる言い伝えである。

また、この基本をどのように屈折させるかについて、先に挙げた三周の説法における法説・譬喩・因縁の展開に、次のような変則を加える試みもなされて

<sup>9</sup> 石田穰二訳注『新編枕草子』上巻（角川書店、1979年）254-255頁

<sup>10</sup> 前掲書、上巻259頁

<sup>11</sup> 大須賀順意著・府越義博編訳『現代文 説教の秘訣』212頁